「日々の理科」（第 1507 号） 2018（H30),-8,22

「初秋の八島湿原（５）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

湿原の遊歩道は、木道が多い。文字通り、木でできた道だ。これは、「人が歩きやすいように」ではなく、「生態系の保護の為に」設置されたものだ。湿原は、１年に１㎜ぐらいしか厚さを増さず、踏みつけられることに非常に弱い。

八島ヶ原湿原にも、全周木道が設置されている。やや老朽化していて、ところどころ木が朽ちて、通りづらい場所もある。

これは「コオニユリ」このような美しい山野草が随所に見られるが、決して木道をはずれて撮影したりしてはいけない。一歩の踏みつけが、湿原の生態系にとっては致命的なのだ。

駐車場から湿原に下りると、池塘の島もすぐ近くに見える。ちょっと池に入って、あの島の上に立ってみたいと思ったが、もちろんＮＧ。仮に乗れても、私の体重で沈没しそうだ。島の周囲にも水草が繁茂し、いずれはこの池も草原化してしまうのだろうと思った。

目立つ植物には、このように名称札がたっていて、大変有難い。しかも常設ではなく、その季節に咲いている花だけに付け替えられているようだ。実際に設置している方を見かけた。これは秋の七草の一つの「オミナエシ」控えめで清楚な野草だ。

「ヤマハハコ」に昆虫がとまって、吸蜜していた。木道から至近距離で撮影できるのが嬉しい。